

時の副詞「とうに」・「とつくに」の意味・用法

金 英 児

一 はじめに

「時の副詞」については、川端（一九六四）において総合的に研究され、体系化されている。本研究は、その分類に沿いながら、特に現在一般的に完了のアスペクトに関わる副詞と認められているものを順次取り上げ、考察するものである。その分類によって、「ある事態の終結によって与えられた象面に現在が置かれるもので、その事態の終結が現在より以前であることを示す」と説明される副詞のうち、本稿では、「とうに」・「とつくに」について検討していきたい。この「とうに」・「とつくに」は、「ある以前に事態の終結があつて、その結果が現在に持続（存続）することを示し、現在と事態の終結としての以前との間に時間量的な隔たりをもつ関係を示す」と規定されている。

同様の関係を表す副詞として、「とうに」・「とつくに」の他に、「すでに」・「つとに」などが分類されているが、このうち「つとに」は日常的な現代語ではほとんど用いられなくなっているので、本稿では考察の対象としない。「すでに」については、「とうに」・「とつくに」を考察するに当たって、比較対象として有効であると思われるので、適宜、考察を加える

こととする。

二 対象の概観

「とうに」・「とづくに」は、「はや(早・速)い」という意味の古典語の形容詞「とし(疾し)」の連用形「とく」に由来する、同根の語であって、意味的に相当にも近いことが予想される。現代語を対象とした『集英社国語辞典』(第二版、集英社、二〇〇〇)と『明鏡国語辞典』(大修館書店、二〇〇三)、『新明解国語辞典』(第六版、三省堂、二〇〇五)を見ると、次のようである。

〔とうに〕

・『集英社国語辞典』(口頭) 早くから。とづくに。ずっと前に。↓「疾くに」の音便

・『明鏡国語辞典』ずっと以前に。とづくに。

・『新明解国語辞典』その事が行われてから時日が大分経過したことを表す。

〔とづくに〕

・『集英社国語辞典』(口頭) ずっと前に。とうに。

・『明鏡国語辞典』ずっと以前に。とうに。

・『新明解国語辞典』現在よりはるか以前の時点においてすでに問題の事態が実現していた(であろう)

ことを表す。

このように簡便な辞書の記述においては、意味的にも非常に近く、「とうに」と「とづくに」が相互に説明に用いられるという状況である。『新明解国語辞典』では、表現は異なるが、実質的な差異はほとんど読み取れない。

ところで、高(一九九七)に『とうに・とつくに』は文法論的な意味の違いはほとんど見られず、地域差が見られるだけであった。』という指摘がある。¹⁾この「地域性」ということについて、詳しい説明はされていないが、「とうに」に関して、たとえば、『大阪言葉事典』(一九七五)に「とくに。つとに。早くから。ずっと前から。」と取り上げたり、『京都府方言辞典』(二〇〇二)にも「とうに」の項目があつて、「早くから。とつくに」と、京都地方の広い地点に分布するところが示されるなどを参照すると、「とつくに」に対して「とうに」は関西方言であるということについての指摘かと思われる。この点については、種々の方言辞典に記載された通りなのであろう。しかし、次のようなデータもある。「とつくに」・「とうに」の新聞での使用数を調べて見ると(朝日新聞二〇〇三年一月一日～二〇〇五年十月三十一日「聞蔵」検索)、「とつくに」総数一六一件、「とうに」八九件であつた。「とつくに」が「とうに」の倍近い件数ではあるが、新聞という標準語使用を原則とする資料の中で、「とうに」の使用がこれだけ見られるということからすれば、「とうに」を単に「とつくに」の方言形として処理することはできないものと思われる。念のため、この総数のうち、東京版に絞った数字を挙げると、「とつくに」は二三三件(総数の七六%)、「とうに」は五五件(同六二%)であつた。東京版では、その地域においていくらか「とつくに」を好む傾向があることは認められるが、やはり、「とうに」・「とつくに」を地域差のみで説明しきることはできないものと思う。

飛田・浅田(一九九四)『現代副詞用法辞典』の「とう」の解説には、『とつくに』の方が現代的にくだけた表現で、誇張の暗示も強い」と述べ、また、田・泉原・金(二〇〇四)『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する—』では、「とうに」は「やや改まった雅語的表現」で「とつくに」は「口頭語的な言い方」と説明されている。これらは使用される文体や用法にその差を求めようとするものであるが、意味的な差に関わるところもあろうかと思う。

次に、「すでに」についても概観しておく。「すでに」には、完了のアスペクトに関わらない用法^②もあるので、時の副詞に関わる記述のみを取り出して示すことにする。

〔すでに〕

・『集英社国語辞典』(完了の語法を伴って)事が終了している意や過程を経て事が現在に及んでいる意を表す語。とつくに。以前に。以前から。

・『明鏡国語辞典』①ある事態が過去に終わっているさま。以前に。もう。

②その時には早くもそうなっているさま。

前掲辞書の「とつに」・「とつくに」の説明と比較して、一見して知られるのは「すでに」の説明に用いられるところの「以前に」に対して、「とつに」・「とつくに」は「ずっと前に」に説明されることである。これらの語はある事態の終結が現在より以前であることを示すものであるが、その「以前」について、「とつに」・「とつくに」はそれが「ずっと前」であるのに対して、「すでに」の場合はその指示が特にないのである。また、同様の比較として、「とつに」・「とつくに」については「口頭語」であるとの注記をするものがあつたが、「すでに」にはないという点も留意される。

以上のような概観をふまえて、まず「すでに」と「とつに／とつくに」を比較し、次いで「とつに」と「とつくに」の検討を行いたい。資料としては、新聞や小説からの用例を主とする。出典表示のないものは作例である。作例については日本語話者のネイティブ・チェックを受けた。

三 「すでに」と「とうに／とつくに」

三・一 「すでに」と「とうに／とつくに」の共通性

- (一) a. 私はすでに彼を知っている。「知っていた」。
b. 私はとうに／とつくに彼を知っている。「知っていた」。
- (二) a. そのことはすでに忘れていた。「忘れていた」。
b. そのことはとう／とつくに忘れていた。「忘れていた」。
- (三) a. 会議はすでに終わっている。「終わっていた」。
b. 会議はとうに／とつくに終わっている。「終わっていた」。

(一) (二) (三) として示した文例は、変化動詞の継続相の例である。「私が彼を知る」あるいは「そのことを忘れる」という行為や「会議が終わる」という事態が、発話の時点（設定したある時点）よりも以前に完了し、変化の結果が現在に持続していることを表している。いずれも、「すでに」、「とうに／とつくに」によって、事態が現在より以前に終結したという完了の意味がより明確になっている。

(四) a. その映画はすでに見ている。「見た」。

b. その映画はとうに／とつくに見ている。「見た」。

(五) a. その噂はすでに聞いている。「聞いた」。

b. その噂はとうに／とつくに聞いている「聞いた」。

(六) a. 彼のアルバムはすでに持っている「持った」。

b. 彼のアルバムはとうに／とつくに持っている「持った」。

(四) (六) は動作動詞の例である。「その映画を見ること」、「噂を聞くこと」、「彼のアルバムを持つこと」が経験として現在に持続するが、「すでに」・「とうに／とつくに」によって、その動作の完了が現在から隔たった以前であることを示している。

これらのように、変化動詞、動作動詞、いずれの場合も「すでに」と「とうに／とつくに」は、ある以前に事態の終結があつて、その事態の終結と現在とが時間量的な隔たりをもった関係であることを示す。金子(一九九五)では、

「勝負はすでにしている」の「すでに」で表示される基準となる時間は「勝負がついた」時間であつて、それから発話時間までの間が「すでに」の表示する時間差である。従つて、ここでも「すでに」は表示状況以前の或る時間帯から起算した表示状況との間の時間差を表示すると判断できる。(四五四頁)

と述べている。ここでは「とうに／とつくに」は取り上げられていないが、同様の説明が可能であろう。

三・二 「すでに」と「とうに／とつくに」の差異

では、「すでに」と「とうに／とつくに」の差異はどのように捉えられるだろうか。

(七) a. その本はすでに読んでいる「読んだ」。

b. その本はとうに／とつくに読んでいる「読んだ」。

(七) aでは現在においてその本を読んだ経験があることに、より重点があり、(七) bではその本を読む行為の完了が現在と隔たった以前であること、その経験がずっと前のことだということを示すことに重点があるように受けとめられる。

(八) a. 桜の花はすでに散っていた「散っている」。

b. 桜の花はとうに／とつくに散っていた「散っている」。

(九) a. 起案はすでにできあがっている「できあがっていた」。

b. 起案はとうに／とつくにできあがっている「できあがっていた」。

(一〇) a. 父はすでに出かけていた「出かけている」。

b. 父はとうに／とつくに出かけていた「出かけている」。

同じく(八) ～ (一〇) bの方に、事態の終結と現在との間に時間量的な隔たりをより強く感じ取れるだろう。

(一一) あたりはすでに暗くなった。

(一二) 序論はすでに書いている。

この場合、「暗くなった」こと、「書き終わった」ことが、ずっと前であっても、あるいは、少し前であってもどちらも

可能である。このように、「すでに」は、事態の成立が直前であつてもよい。したがつて、「現在における事態の完了」とも言える、そういう用法にも連続する。つまり「すでに」は、その事態の成立が、現在の直前であつても、現在よりも前、以前でさえあれば、どのような時点であつてもよい。

「あたりはとうに／とつくに暗くなった」では、直前の事態の完了は表さない。「暗くなった」のが相当程度以前でなければならぬ。この点が「すでに」と「とうに／とつくに」との差である。すなわち、「すでに」は事態の成立・完了が、現在より以前であればどの時点でもよい。それに対して、「とうに／とつくに」は事態の成立・完了が現在より相当程度隔たった以前である。

では、この相当程度隔たった以前とは、どのような時点であろうか。「あたりはとうに／とつくに暗くなった(ている)」では、「暗くなった」のは数十分前であろうか。「序論はとうに／とつくに書いてある」では、序論を書いたのが数十分前、あるいは時間単位では不自然である。やはり、数日、あるいは月単位の隔たりが想像される。すなわち、この時間量の隔たりは物理的な時間として捉えられるものではない。また、「あたりが暗くなった」時からある時間が経過していても「あたりはとうに／とつくに暗くなった」と表現するかどうかは、表現主体により、おかれた状況により違ってくることは言うまでもない。すなわち、「とうに／とつくに」によって表される時間量の隔たりは、心理的であり、主観的なものである。このような「とうに／とつくに」に対して「すでに」は、

(二三) 昨年の春、彼はすでに(?)とうに／?とつくに 大学生になつてゐる。

このように、「彼が大学生になる」という事態の成立の時点を「昨年の春」と明示することもあり得る。

(一四)「あなた、いったいなにものです。どこかの星からおいでになった宇宙人ですか？もしもそうなら申し上げておきますがね、この月は地球人のものです。地球人は一九六九年の七月に、すでにこの月に着陸しとるんですからな」

(井上ひさし『ブンとブン』)

これらの例では、発話時と事態の成立時との隔たりが客観的具体的な時間として示される。しかし、そこでは、その隔たりを言うことに重点があるのではない。むしろ、内容に客観性をもたせることで、完了した事態の継続によって与えられる現在の状況、現在の経験を説得的に言うことに働いている。「すでに」は、このように、現在、あるいは基準時の事態を言うことに焦点があるため、たとえば、事態の完了は裏に隠された、次のような例も見える。

(一五)彼はそれほど若くもなかった。今から四年まえ龍子と夫婦になったとき、彼はすでに三十三歳であった。

(北杜夫『楡家の人びと』)

(一六)その時の私は既に大学生であった。

(夏目漱石『こころ』)

(一七)最近は物価が既に(？とうに／？とつくに)一部上昇に転じている。

(朝日二〇〇四・五・二六朝刊)

(一七)は、実際の新聞記事の例で、新聞の記事というのはその内容を必要とするその時に読むのが普通である。また、物価の上昇率は一月ごとにはかるもので、およそ三ヶ月くらいの指数を持っている。物価の大きな流れを切り取った「最近(は)」によっておよそ三ヶ月が取り上げられる。つまり、「最近(は)」という言葉が文脈によって「三ヶ月ぐらい以前より」というかなり具体的な時を指し、絶対時に近い内容を持つ客観性を持つ。ここでいう客観性とは、客観時とか絶対時⁽⁴⁾などのような限定的なものではないが、その文の中でその時の副詞によってかなりの具体性を持つような場合をいう。

例えば、「最近の子供は集中力がない」の「最近」は3、4年くらいの幅であり、「最近めつきり寒くなりました」の「最近」は一週間くらいを意味する。これらは、以前を含んだ「広げられた現在⁵」として、文脈によってかなりの具体性を持ち、絶対時に近い内容を指示するもので、そのような意味で、客観性を持つと言える⁶。新聞に用例を見ると、「すでに」は原則的に客観性が求められる種々の記事において例が見られるが、「とうに／とつくに」はコラム・エッセイ・生活面などの記者や筆者の感情・気分などが入り得る文章にほぼ限られる。このことは、「すでに」が、以前に終結した事態の継続としての現在の状況を、どちらかと言えば、客観的に述べることに重点がある、ということを裏付けるであろう。また、新聞の例はあくまでも書き言葉ではあるが、「すでに」に対して「とうに／とつくに」が、よりくだけた表現として口頭語的な傾向を持つことも認められよう。

次に、「花が散る」という事象を仮に取り上げて「すでに」と「とうに／とつくに」の用例を調べてみると、ある典型的な傾向が見られる。

(二八) 施設内には五〇本近いサクラがある。すでに散り始めているが、まだまだ見ごろ。

(朝日二〇〇四・四・九・朝刊)

(二九) 大型連休の折り返しとなった2日も、石割桜は多くの観光客でにぎわったが、桜はすでに散り始め葉桜の状態。観光客からは「満開だと思ってきたら散り始めていてがっかりした」との声があがった。

(朝日二〇〇五・五・三・朝刊)

(三〇) 金沢城・兼六園管理事務所によると、ソメイヨシノはすでに散り始めているが、咲きははじめの旭桜などヤマザクラ系の桜

が楽しめるという。

(朝日二〇〇四・四・九・朝刊)

(二二) 四月六日というのに東京の桜はとうに散り、すでに初夏を思わせるような中、第一三回公開学習会が聖路加看護大学で行われた、今回は

(日本遺伝看護研究会「ニュースレター」)

(二三) 桜の花はとうに散り、新緑の芽も濃くなった。日傘代わりの大木の下の涼しさだけが旬のよう。

(中日二〇〇五・五・一四・朝刊)

(二四) 4月はあわただしく過ぎていった。桜はとうに散り、駅前の花水木が満開だ。狭い庭にはリラやシャクヤク、コデマリ、スズランなどの花が咲いている。

(河北新報二〇〇一・五・二・朝刊)

・すでに↓花は散り始めた：現在の桜の木や別種の桜の様子。

・とうに／とつくに↓花は散り：現在は次の事象が起こっている。

というわけである。「すでに―散り始めた」の場合は、現在は落花中であるが、開花―満開―散り始め―散り終わりという推移の中で連続的に捉えられた現状を言うことに重点がある。それに対して「とうに／とつくに―散り、…」の場合は、「花が散ること」がずっと以前に完了して、「花が美しく咲いていたこと」・「美しく咲いていた花が散ったこと」が、過去のこととして、現在と隔絶したものと捉えられている。「花が散る」という事態は確かに完了し、現在は散ってしまった状態であることに違いはないが、その継続をむしろ断絶的に捉えるところに「とうに／とつくに」が用いられるのである。

(二二)の例の「すでに」は、初夏を思わせるような陽気となって、その状態が現在に持続していることを言う。

このように「すでに」は、現在より以前の事態の成立・完了によって与えられた現在の事態を言うところに焦点がある。事態の成立・完了時との隔たりを問題としないために、客観的で具体性をもった時の表現とも共起し得る。一方、「とうに

／とつくに」は、事態の成立・完了が心理的・主観的に相当に隔たっていることを表すことに重点がある。そのような心理的な時間量の隔たりを表すために、具体的に明確な時点の指示とはなじまない。

四 「とづく」と「とつくに」

四・一 「とづく」と「とつくに」の共通性

前項の「すでに」との比較で、「とづくに」について、次のような点が確認できた。

- ・ 事態の成立と現在との時間量的な隔たりが心理的に、主観的に大であることを示す。
- ・ 状況によって、事態の完了によって与えられた現在の事態を、現状と隔絶したものと捉えようとする。
- ・ 口頭語的なややくだけた表現である。

「とづくに」・「とづくに」は、前述したように古典語「と（早・速）し」の連用形「とく」に由来する、同根の語である。ウ音便と促音便という異なる音韻変化をおこしているが、これまで述べてきたように、文法論的な差異は見出しにくく、ほぼ交替可能で意味的にほぼ重なる。

四・二 「とづく」と「とつくに」の差異

(二四) 特に女性には、月ごとに訪れるものとずっと付き合ってきたという感覚がある。月の満ち欠けに永劫（えいごう）正しいリズムがあり、人間の体にも月ごとに受け止める周期がある。または、妊娠したときにはじめて知ったのだが、満月の夜には赤ちゃんがたくさん生まれるとのこと――。

そう聞いていたので、私も自分の時には夜空を見上げて待ちかまえていたのだが、娘は満月を過ぎ、予定日もとうに過ぎてから、いかにもものんびりと生まれてきた。月の形はとつくに小さくなっておりました。

(朝日二〇〇二・九・二二・夕刊科学 谷村志穂)

(二五) 歩き回って、気がつくととうに昼時を過ぎていた。空腹で足が痛かった。ひと休みしよう——と周囲を見回し、……レストランを見つけた。

(宮部みゆき『模倣犯』)

(二六) ドアチャイムがまた鳴った。さっきのようなせつかちな鳴らし方ではなく、ゆっくりと訪いをいれるように、二度、三度と。由美子はベッドサイドのデジタル時計を見た。とつくに夜になっている。由美子が凍っているあいだに時は過ぎていた。

(宮部みゆき『模倣犯』)

(二四) はエッセイであるが、ひとつの文脈のうちに「とうに」と「とつくに」がある。(二五)(二六)は同じ作者のひとつの小説のうちに「とうに」と「とつくに」が使われている例である。これらの「とうに」と「とつくに」には何らかの使い分けがされているはずで、意味・用法によるものと考えられる。では、それは、どういう使い分けなのだろうか。

(二七) a. コンサートはとうに始まっていた。

b. コンサートはとつくに始まっていた。

(二八) a. 店の閉店時間はとうに過ぎている。

b. 店の閉店時間はとつくに過ぎている

「とうに」より「とつくに」の方が、コンサート会場に入った時、コンサート開始からの時間の経過が予期した以上であったことがわかる。その意外であったことへの驚きや会場に入ったときの気まずさ、あるいは時刻を過ぎしてし

まったことへの後悔、つまり、しまった、まずかったなあ、もっと早く来ればよかった、などと展開することが予想されて、インパクトのより強い表現となっている。(二一八)店の閉店時間が過ぎてしまったことも同じ説明ができるだろう。

(二一九)打ち合わせが直前まで入っていて社を出たのが遅れた。開演時間はとうに過ぎていているが、アルペジオーネソナタだけでも全曲聞きたい。ロビーに入り、演奏中の曲の終わるまで待つて、係の女性に案内されて席につく。

(朝日二〇〇四・一一・六・朝刊小説 篠田節子)

(三〇)遅刻しないように早目に来たはずなのに、妻と私が講堂に入ると子供たちは「仰げばとうとし」をうたっている。驚く私に、誰かが「リハーサルだから」とささやいてくれた。：「起立、礼、着席」。リハーサルがまだ続いているようである。：私はまた娘のことを考える。：講堂の前のほうではモーニングを着た男性が話しはじめた。「来賓のご挨拶」という日本語が私の脳裏をかすめる。これはリハーサルではない。とすると、子供たちがさつきから卒業証書をもらったり、「起立、礼、着席」を繰り返したりしていたのはリハーサルでなかったことになる。私があるの思いに耽っているうちに卒業式のほうがつとくにはじまっていたのだ。私は恥ずかしく思い、この来賓のお話に一生懸命に耳を傾ける。

(asahi.com コラム二〇〇四・三・三〇)

たんと述べている(二一九)に比べて、(三〇)では、もの思いをしているうちに卒業式が始まっていたことに気がついているの驚きと後悔、気がつかなかったことに対する恥ずかしさなどを「とつくに」が強く表していると思われる。

このような例から、(二四)を読み直してみる。「とうに」は娘が予定日をずっと過ぎてから生まれたという、感覚的な時間隔たりを示す。その隔たりと同じ時間量なのだが、話題となっている月の形については、自分が親しみ、疑いも抱かなかった自然の摂理に適っていなかったことへのあきれた気持ちを、ユーモラスを含めて、「とつくに」によって強調していると考えられる。

(三二) 十数年前、県東部の花火大会に他県の女友達と出かけた時のことです。帰りに国道沿いの大きいレストランに立ち寄った時は、九時をとうにまわっていました。にもかかわらず中は子ども連れでムンムンしており、やつのことで空席を見つけて座ると、広島友人が、開口一番に「花火はとつくに終わったのにこんな時間まで高知の人は子ども連れ歩くのか」と大変な驚きよう。

(高知新聞二〇〇五・一〇・二朝刊)

「とづく」は、思いがけない時間の懸隔を示しているが、「とづくに」には地の文にある「大きな驚き」が込められている。また、いくらかは非難の気持ちを読み取ることができるだろう。このように、「とづく」は、思いがけない時間量の懸隔を、当然のこととして意外な気持ち、驚きをもって示すが、その意外性が一層強くなって、驚きを強調したり羞恥心や後悔、非難やあきれられる気持ちなど、多様な気持ちを「とづくに」には読み取ることができるのである。

(三三) スポーツをする身体というものに、ずっと憧(あこが)れてきた。…歳(とし)を経て、若い頃(ころ)の焦(あせ)られるような憧(あこが)れなど、とづくに忘れていたと思った。…何が書きたいのか。わたしは、何を書こうと足掻(あが)いているのか。考え続ける。書くことは、自分に向かい合い、自分を深く掘り下げること(ときに、深く傷つけること)だ。

考え、足掻(あせ)き、掘り起こし、わたしは「野球」というスポーツを自分の作品のモチーフに選んだ。…書き続けていくうちに、何十年も前に覚え、とづくに枯(か)れ果て、忘れ去ったと思っていた感情が生々しく蘇(よみがえ)ってきた。

一球を捕捉(ほそく)するために、一球を投げるために、一球を打つために、ただそれだけのために動く身体の美しさ。惹(ひ)かれ、焦(あせ)がれ、憧(あこが)れてきたものをこの手で、この指で、この文章で表現したい。(毎日二〇〇五・九・二四 朝刊)

「とづくに」、「とづくに」どちらも、スポーツへの憧(あこが)れをずっと前に忘れたことを表しているが、「とづくに」では、ただ

「とうに忘れていた」と淡々と述べるだけのものを、「何十年も前に覚え」ていて、振り返れば驚くほど昔に忘れたのであったということ、そして、「枯れ果て」ていたものが「生々しく蘇ってきた」という、感覚の落差の激しさを述べる方では、「とつくに」を使う。こうした感情の強さが「とつくに」には込められるのである。こうした、「とつくに」が表す感情の強さを利用したのが次の例である。

(三三) 問われる産廃 禦嵩町住民投票を前に(下)

共関与民間だったらとつくに倒産 コスト意識薄い行政

厳しい安全基準、そして「民間の三割高」といわれる処理費が、排出企業からそっぽを向かれた形だ。安全性を追求すればするほどコストはかさみ、慢性的な経営難。産廃処理の業界では「民間業者だったら、とうに倒産している」とかさやかれる。

(中日一九九七・五・二〇・朝刊)

(三四) 日本株式会社はとつくに破たん!

PHP試算、債務超過は370兆円

日本は三七〇兆円の債務超過。民間企業なら、とうに破たんしている。(産経「ZAKZAK」一九九七・七・一一)

「とつくに」が見出しに使われ、本文中では全く同じ内容に対して、「とうに」が用いられている例である。「とつくに」のインパクトの強さを見出しに効果的に利用しようとしたものである。こうした例は、たとえば、インターネット上の記事などにも数例見られるが、その逆の見出しに「とうに」を用い、本文中が「とつくに」になるケースは見られない。

(三五) 淳蔵は黙ってうなずき、酒を口にした。「お仕事、お忙しいんですか?」「テーラーの時代はとつくに終わってます」「月に

何着ぐらい作るんですか「多いときでも五着ぐらいかな。若い頃は……」

(藤田宜永『愛の領分』)

(三六) 日はとつくに昇っていた。時計に目をやると、九時を大きく回っていた。今日も寝坊だ。…最近はそんな自分に嫌気がさすことすらなくなってきた。

とりあえず居間において、とつくに冷めた味汁を温め直し昨日の残り物で朝食を済ます。

(「東邦砂漠」)

(三七) まさか……と思ってもすでに手遅れである。水を断つても水をやっても、ダメなものはダメ。なんとか残った葉の先は変色し、茎はしなだれ、表土の具合は明らかに他の鉢のそれと違ってくる。とつくに根はしんでいるのだから、すべては後の祭りだ。

(朝日二〇〇四・七・七・夕刊 いとうせいこうの自己流園芸 ベランダ派)

(三五) では、まだ月に何着かは作るのだから、テーラーの時代が完全に終わってしまったてしまっているわけではないのだが、感情的には、もう終わりで、決して後戻りすることはないという気持ち「とつくに」には表されていよう。(三六) では、前の「とつくに」には、寝坊してしまつて授業に遅れてしまったという意識が内面に込められており、後の「とつくに」は、味噌汁が温め直さなければならぬところまで冷え切っていることを表しているが、いずれも時間量の隔たりがはなはだしく大で、もう授業には間にあわない、あるいは、もう飲めないという意識につながるすれば、隔たりの極大をいうとも言い得る。一つ目の「とつくに」について、さらに続く文章を読むと、それは単なる寝坊ではなくて、自分が「ダメ人間」になったという危機感も感じないほどに墮落してしまつていふことを、象徴的に表している。そのような取り返しのつかない、気分的な懸隔感を、この「とつくに」に感じ取ることができる。

(三七) では、植木市で買つてきた鉢植えが乱暴な扱いのために突然に枯れ始めるのであるが、この「とつくに」は、「ダメなものダメ」、「後の祭り」などの表現と並んで、現状が手遅れで、もう何の方法もないという、どうしようもない無力感を表している。

このような、手遅れである、とか、取り返しがつかない、とか、あきらめの気分を含むこともあり得る。そのようなあきらめの気分・ニュアンスを含みこむために、その結果として、より口頭語的なくだけた文脈の中でより多く用いられることになるものと考えられる。

五 まとめ

今回、完了のアスペクトに副詞的呼应をもち、ある以前に事態の終結があつてその結果が現在に持続することを示し、そして、現在と事態の終結としての以前との間に時間量的な隔たりをもつ関係を示す語である「すでに」と、「とうに」・「とづくに」について検討を加えた。

その結果をまとめると、次のように結論付けられる。

・「すでに」は事態の終結の時点と現在との時間量的隔たりの大小を問わないのに対して、「とうに」・「とづくに」は時間量的隔たりが心理的に、主観的に大であることを表している。また、「すでに」は、以前に終結した事態の継続としての現在の状況を客観的に述べることに重点があるのに対して、「とうに」・「とづくに」はよりくだけた表現として口頭語的な傾向を持つ。

・「とうに」と「とづくに」は、同根の語であつて、ほぼ同じ意味で交代可能であり、文法論的にはその差異を見いだせない。

・「とづくに」は「とうに」と比較して、時間量的隔たりが大であると認識される場合に用いられ、インパクトのより強い表現となる。その結果、手遅れである、取り返しがつかない、というニュアンスをも含みうる。

(1) 高(一九九七)では、『とうに』と『とつくに』は文法論的な意味の違いはほとんど見られず、地域差が見られるだけであった。これらの副詞は基準時以前に動作変化が終わったことと併せて、話し手・聞き手の予想より前に動作・変化が行われたこと、すなわちモーダルな意味も含んで表す」と述べている。

(2) 「すでに」については、以下に述べる「とうに」と類縁の意味以外に、時の副詞とは違った意味を持つが、ここでは「とうに」と対照的な意味についてのみ取り上げる。「すでに」の違う用法について言い添えると、本来「すでに」には「現在一つの事態が成立した状況である」という時の表現と「すつかり(すべて)」という全量を表す表現にまたがっている。例えば、アスペクトと呼応しない、「このことで彼の罪状はすでに明白である。」のような全量を表す場合は、「時の副詞」とは言えないので、ここでそれについては述べない。

(3) 継続相シテイルは主体の変化を表す主体の変化を表す動作動詞が「動作の継続」を表しているのに対して、変化動詞は「変化の結果の継続」を表している。奥田(一九七八)、工藤真由美(一九八二、一九九五)

(4) 佐治(一九九一)によると、「今日」「さつき」「先月」「最近」などのように発話時点を基準として相対的に位置づけられる時を表すものが相対時点時であり、一方、「一九八八年」「九月」「二五日」のように絶対的な時点を表すものが固有時点時(非相対時点時)である(二六八頁)。工藤浩(一九八五)では、後者の固有時点時(非相対時点時)を客観時(非相対時)とされる。

(5) 工藤浩(一九八五)で「最近・近ごろ」はシタとも反復的なシテイルと共起し、過去を含んだ(広げられた)現在を表すと述べているが、ここでいう「過去」は時点的な過去ではなく、川端(一九六四)の「現在からのある隔たりを持った「以前」と呼ぶべきものである」と考え、「以前を含んだ広げられた現在」として見た。(五四頁)

(6) 佐々木瑞枝(監修・執筆)岡田純子・播岡恵・丸山伊津紀(執筆)(二〇〇二)『表現を豊かにする副詞』には客観的な副詞として「すでに」、主観的な副詞として「とつくに」を分類している。(五八頁)

(7) 東邦大学医学部文芸部の部誌「東邦砂漠」

【参考文献】

- 北原保雄（編）（二〇〇三）『明鏡国語辞典』初版 大修館書店
- 小学館辞典編集部（編）（二〇〇三）『類語例解辞典—使い方の分かる—』新装版 小学館
- 田忠魁・泉原省二・金相順（編）（二〇〇四）『類義語使い分け辞典—日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する—』研究社
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（編）（二〇〇〇）『岩波国語辞典』第六版 岩波書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（二〇〇一）『日本国語大辞典』第二版 小学館
- 林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭（編）（一九九七）『例解新国語辞典』第四版 三省堂
- 飛田良文・浅田秀子（一九九四）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 広瀬正宜・庄司香久子（編）（一九九四）『日本語学習使い分け辞典』講談社
- 藤原与一・磯貝英夫・室山敏昭（編）（一九九四）『表現類義語辞典』第六版 東京堂出版
- 森岡健二・徳川宗賢・川端善明・中村明・星野晃一（編）（二〇〇〇）『集英社国語辞典』第二版集英社
- 森田良行（一九九四）『基礎日本語辞典』第六版 角川書店
- 山田忠雄・酒井憲二・山田明雄・柴田武・倉持保男（編）（二〇〇五）『新明解国語辞典』第六版三省堂
- 奥田靖雄（一九七八）「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』五三・五四
- 金子 享（一九九五）『言語の時間表現』ひつじ書房
- 川端善明（一九六四）「時の副詞—述語の層についてその一—」『国語国文』三三一—一 京都大学
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子（二〇〇〇）『時・否定と取り立て』岩波書店
- 金英児（二〇〇六）「時の副詞—「すでに」・「もう」・「もはや」について—」『日本文化学報』第二八輯 韓国日本文化学会
- （二〇〇六）「時の副詞「やっ」と・「ようやく」の意味・用法」『国文論藻』五 京都女子大学大学院

工藤 浩 (一九八五) 「日本語の文の時間表現」『言語生活』四〇三

工藤真由美 (一九八二) 「シテイル形式の意味のあり方」『日本語学』一一一 明治書院

—— (一九九五) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房

高 正道 (一九九七) 「基準時から見て、相対的な過去を表す時間副詞その一—アスペクトの面を中心として—」『現代日本語研究』

第四号大阪大学現代日本語学講座

国立国語研究所 (一九八五) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所報告八二秀英出版

国立国語研究所 (編) (一九九二) 『副詞の意味と用法』大蔵省印刷局

佐々木瑞枝 (監修・執筆) 岡田純子・播岡恵・丸山伊津紀 (執筆) (二〇〇二) 『表現を豊かにする副詞』アルク

佐治圭三 (一九九二) 「時詞と数量詞—その副詞的用法を中心として—」『日本語文法の研究』ひつじ書房

仁田義雄 (二〇〇二) 『副詞的表現の諸相』新日本語文法選書三 くろしお出版

日本語教育誤用例研究会 (著) 佐治圭三 (監修) 福島泰正 (編) (一九九七) 『日本語の考えた方・実践マニュアル類似表現の使い分

けと指導法』アルク

益岡隆志・田窪行則 (一九九二) 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

山崎貞子 (二〇〇三) 「古代語の時間副詞「すでに」の考察—古代中国語「既」と比較して」『国文』九九号 お茶の水女子大学

渡辺 実 (編) (一九八三) 『副用語の研究』明治書院

*資料

・朝日新聞〔聞蔵〕検索二〇〇三年一月一日〜二〇〇五年十月三十一日、asahi.com 検索

・日経テレコン21記事検索

次の作品は「青空文庫」から引用した。

北杜夫『楡家の人びと』、夏目漱石『こころ』、藤田直永『愛の領分』

時の副詞「とうに」・「とつくに」の意味・用法

井上ひさし (二〇〇〇) 『ブンとブン』 新潮社、
宮部みゆき (二〇〇一) 『模倣犯』 小学館

(本学大学院特別研修者)